

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520224

研究課題名(和文) 18世紀演劇の非標準英語使用を通じた他者表象の文化研究

研究課題名(英文) Cultural Studies on "Otherness" Represented in the Non-Standard English Usage in the 18th-Century Drama

研究代表者

岩田 美喜 (Iwata, Miki)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50361051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀のイギリス演劇に描かれる「非標準的な英語」を喋る人物たちに焦点を当て、ことばを通じた地理的/政治的/社会(階級)などによる「他者化」の現象を探るものである。18世紀は英語の標準化が進んだ時期であり、演劇という文芸ジャンルはそれ以外の英語を用いる者を「周縁」として前景化するはたらきを持っていた。

だが、本研究ではさらに一步踏み込んで、周縁的存在とされるアイルランド人劇作家たちが自ら差異化のシステムを助長するような作品を書いたケースを分析し、また日本における言語を通じた差別化の問題を比較文化的に論じるなど、一枚岩的には成り得ない「言葉と差別」の実相を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： In this research project, I dealt with the eighteenth-century English drama, especially characters speaking non-standard English, in order to investigate how the dramatic language usage in the plays written for the London audience foregrounded "otherness". The standardisation of English, by setting up a binary opposition of the central/the marginal, inevitably went hand in hand with the alienation of non-standard English speakers including the Scottish, the Irish and the West Indians, and theatre functioned as a centre stage for that process.

Moreover, this research took one step further to explore this discriminating system and revealed that the actual conditions were far more complicated than that. For example, not a few Irish playwrights self-humbly pandered to the trend. On the other hand, from the viewpoint of comparative studies, I suggest that Hiberno-English as the counter culture can be a model to cope with the Japanese language discrimination.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：アイルランド文学 演劇研究 比較文化 英語史 方言研究

1. 研究開始当初の背景

本研究者は、2000年提出の博士論文以来、アングロ＝アイリッシュ系の劇作家たちによる、英語で書かれた演劇の研究を進め、近年は特に、「ステージ・アイリッシュマン」と呼ばれる、ステレオタイプとしてのアイルランド人表象の分析に取り組んできた。この領域における従来の研究は、エドワード・サイードが『オリエンタリズム』(Edward Said, *Orientalism*, 1978)で表明した、「英文学におけるオリエンタ表象は、西洋が自らを規定するための鏡として生み出した架空の概念的他者だ」という議論を出発点とし、新歴史主義・ポストコロニアル批評的な研究手法を採用したものが多く、具体的には、近代アイルランド文学を、ナショナル・アイデンティティ獲得の過程として読み解く、デクラン・カイバード『アイルランドを創る』(Declan Kiberd, *Inventing Ireland*, 1995)などが挙げられる。

これらに通底するのは「イングランド人による他者表象は、歪められ、貶められており、他者の烙印を押された側の作家たちは、押しつけられた虚偽のイメージと戦っている」という議論である。だが、多種多様な英語演劇のテキストを当たってみると、この一枚岩的なイングランド/非イングランドの図式が通用しないことも多い。とりわけ、このような二分法では、ロンドンで活動したアイルランド系作家たちによる、一見イングランド人に迎合したような作品を正しく評価することができない。本研究者はこの事実を重要視し、アイルランド人トマス・シェリダン(Thomas Sheridan, 1719-88)の標準英語推進運動には、英語をイングランド人の専有物にさせたくないという心性が潜んでいると指摘し、またジョージ・ファーকার(George Farquhar, 1678-1707)の戯曲に繰り返し登場する訛りのきついアイルランド人は、当時のステレオタイプを換骨奪胎してアイルランド人表象を異化したものだとして論じた。

こうした研究を進めながら、幅広い演劇テキストを渉猟するうち、近代英語演劇の「訛った英語を喋る愚か者」のステレオタイプには、アイルランド人のほか、スコットランド

人、ウェールズ人、インド人、イングランド人労働者などの数パターンが存在することが判明した。一般に、18世紀の英国は、初の本格的な『英語辞典』(1755)が編纂され、「正しい綴り方＝正字法」の概念が広まるなど、英語の標準化・中央集権化が進められた時期だとされる。だが、演劇テキストは、差別的な言説を助長する一方で、多種多様な非標準英語を保存する役割を果たしていたのである。しかし、本研究者が調べた限り、「ステージ・スコティッシュ」や「ステージ・ウェーリッシュ」の研究は皆無といってよく、またインド訛りの英語や労働者の英語については、18世紀ではなく現代演劇の文脈から論じられることが多い。しかも、現代劇におけるインド系移民や労働者の表象は、多文化主義の観点からおしなべて肯定的・好意的に描かれることが多く、18世紀演劇とは完全な逆転現象を起こしているが、これについての研究も研究開始当初は進んでいなかった。

ゆえに、これまでのアイルランド表象研究という礎石のうえに、その他の非標準英語の表象を幅広く分析することで、一見すると寓意に断絶が起こっているように見えるところにも、実は連綿と、「高尚文化による抑圧」と「対抗文化による反逆」のせめぎ合いがはたらいていたことを明らかにできるのではないかと、本研究者は考えた。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀のイギリス演劇に用いられた訛りや地域語などの非標準英語の分析を通じ、近代演劇における他者表象の新たな一面を掘り起こすことを目的とし、具体的には以下の4点を段階的に明らかにすることにあつた。

(1) 18世紀を中心とした近代英語演劇における、非標準英語の使用例をできる限り網羅的に収集し、それを、地域別(ウェールズ訛り、スコットランド訛りなど)、国別(アフリカ黒人の英語、インド人の英語など)、さらには階級別(労働者の英語、学者の学術的英語、宮廷人のフランス語訛りなど)などに分類したデータベースを構築する。

(2) 収集したデータの分析を行い、先のアイルランド人表象研究の成果を活用しながら、18世紀演劇における非標準英語を通じた多種多様な異化のメカニズムを解明する。

(3) 18世紀演劇研究によって得られた所見を現代演劇研究や、日本の現代文学研究の成果などと比較検討し、一見すると断絶している各々の文化や時代における言語と他者のダイナミズムを探る。

(4) 本研究の成果を、国内はもとより国際学界においても発表し、本研究の提示する「非標準的な言語使用を通じた他者表象」という文化研究モデルを国際的に通用するものに高めてゆく。

3. 研究の方法

本研究の特徴は、(1) 非標準英語の使用を通じた他者表象を、単一ではなく重層的な意味を持った記号として分析するところ、

(2) 現代日本文学との比較文化的研究を取り入れ、汎用性の高い「非標準的な言語使用を通じた他者表象」のモデル構築を目指すところ、にある。

(1) について、本研究者は、演劇における非標準英語の使用には他者をコミュニケーション不可能な存在として差別的に異化するはたらきと同時に、その差異性が「対抗文化」としてはたらくことがあり得るという立場から研究を進めた。また、時代的には18世紀から現代までを取り扱うことで、この意味の重層性を多面的にとらえ、その変遷を明らかにする予定である。

(2) については、翻訳やアダプテーションといった文化論的なテーマにも積極的に取り組み、「標準英語/非標準英語」という18世紀イングランドで確立された二項対立モデルを敷衍して、シェイクスピアを踏襲した現代日本文学作品における「世界語としての英語/地域語としての日本語」や「標準日本語/東北方言」といった問題をも研究の対象とした。

このように、個人研究としては広大な時間・空間にまたがる種々のテキストを、研究期間の4年間をかけて粘り強く横断した本研

究の特色を簡潔に列挙すれば、以下のようになる。

【力学的な表象文化論】舞台上で実際に語られることばを通じて他者表象の重層性を探求する本研究は、こうした重層的意味を静的なものではなく、力学的なものとしてとらえた。18世紀以前の演劇では文明化を必要とする「野蛮な」笑われ者だった存在が、19世紀のロマン派の時代になると「高貴なる野人」として崇高化され、さらに20世紀には植民地解放の問題と結びついて、日本文学などの他文化のモデルとなるなどの表象文化の歴史を、本研究は孤立した点の集合ではなく動的な流れとして認識する、新たな認識枠を提示した。

【間テキスト性の重視】本研究は、間テキスト性(intertextuality)を重視した。これは、18世紀から20世紀までにわたる幅広い演劇テキストを渉猟するという事に留まらず、英語史や社会史的な文献史料や、日本における関連作品なども取り扱い、多面的な他者表象のネットワークを構築した。

4. 研究成果

研究成果の初年度である平成22年度には、論文2本と計2回にわたる国内外での成果発表を行った。このうち『東北日本文学研究』(第1号)に掲載された論文「『お人好し』における感受性の経済効率」は、18世紀のアイルランド人劇作家オリヴァー・ゴールドスミス的事实上の処女戯曲『お人好し』(1767)が、当時のロンドン演劇界で腫瘍を占めていたセンチメンタリズムの言説とどのように交渉していたかを論じたものである。また、*Studies in English Literature* に掲載された論文“‘I’ll go romancing: The Composite Nature of Storytelling in *The Playboy in the Western World*’”では、20世紀初頭のアイルランド人劇作家J.M.シングの代表作品を扱い、そこで用いられた“Hiberno-English”と呼ばれるアイルランド英語の使用が、文化的ナショナリズムと絡む重要な問題であったことを指摘した。

また、台湾大学(台北市)で行った口頭発表“Magnificent Seven Shakespeares: Inventing

Shakespeare's Biography as Manga”では、英文学のキャンノンであるシェイクスピアを、現代日本の漫画がどのように受容しているかを論じ、言語（英語／日本語）、メディア（演劇／漫画）、人種（アングロ＝サクソン／アジア人）など、ハロルド作石『7人のシェイクスピア』という漫画のなかで、さまざまな異文化同士の交渉が試みられていることを検証したものである。

平成23年度は3月11日に起こった東日本大震災のために本務校の研究・教育機能が一時的に大きく麻痺・停滞したため、年度の前半はあまり大きな成果を挙げられなかったが、8月末より9月にかけて英国ウォリック大学演劇学科による東日本大震災被災研究者支援プログラムと科研費を組み合わせ活用し、ウォリック大学図書館を利用した研究資料収集旅行を行うことが出来たために、状況が改善された。

成果発表については、同様に東日本大震災のためもあって、論文執筆は1本に留まったが、学会での口頭発表は2度行った。このうち5月末に北九州市立大学で開催された日本英文学会のシンポジウム「近代イギリス演劇におけるスペクタクルと音楽」では、18世紀のアイランド系劇作家R・B・シェリダンが、当時ロンドン演劇界で流行していたスペクタクルの要素と自身の出自につらなるアイランド性を、作中でどのように混血化させたかを論じた。11月に東北大学で開催された日本英文学会東北支部大会では、19世紀のメディア論とアイランド表象について口頭発表を行った。

そのほか、論文「W.B.イェイツ『煉獄』の執筆過程に見る混血恐怖」は、『煉獄』の推敲の課程をたどることによって、アイランド名家の没落を憂えた超自然的な詩劇のうちにイギリス・ルネサンス演劇という正典の痕跡を見出し、正典のことばとローカルなことばとの格闘を論じたものである。

平成24年度は、最終的な成果発表に向けてマスタープランに沿ったかたちでの研究成果の発表に務めた。資料／情報収集に関しては、当該年度は本研究者が、6月に急性腹膜炎で緊急入院、12月にも術後イレウスで再

度緊急入院するなど健康上の問題があったため、前年度のように海外の大学や図書館まで資料収集に赴く事は出来なかったが、国内での資料収集や国内学会への参加を積極的に行うことによって、研究に大きな滞りは出なかった。

当該年度の主な研究成果発表には、論文を2本発表したほか、国内学会での口頭発表が1本、また懇請されて参加した国内学会のシンポジウムにおける発表2本などが含まれる。このうち *Shakespeare News* 52:1 (2012) で発表したベン・ジョンソン『エピソード』論では、劇中でのロンドンの空間表象が、紋章学的比喩表現を用いて、言語的にも断片化されていることを論じた。また、2012年10月に秋田大学で開催された日本シェイクスピア学会における口頭発表では、ジョンソン『新しい宿』における女性表象が、衣服の着脱に関するディクッションを通じて描かれていると分析した。このほか、同年12月に慶応義塾大学日吉キャンパスで開催された日本ワイルド協会シンポジウム「ワイルドと世紀末演劇的ヴィジョン—サロメ・悲劇・喜劇」では、ワイルド劇の喜劇性が、先行テキストの反復である引用というテクニクに大きく依拠していることを論じた。これらはいずれも、言語の逸脱的な使用が持つ演劇性について考察を加えた研究である。

本研究課題の最終年度に当たる平成25年度は、過去3年間に得られた知見を成果として国際的に発表することに力を入れた。2年目および3年目の段階で、本研究が当初設定した課題である「英語演劇のテキストにおける非標準英語使用を通じた他者表象」の研究には、その視野を広げる必要があることが確認された。すなわち、翻訳やアダプテーションを通じた比較文化的な他者表象論をより重点的に扱うことになったため、本年度の研究成果の多くは比較文化的な要素を含んでいる。

口頭発表における最大の成果は、2013年6月にモンペリエ大学(フランス)で行った“A Macbeth Playing Baseball: Shakespeare Adopted into Japanese Crime Fiction after 3.11”である。これは、シェイクスピアの『マクベス』を下

敷きにした伊坂幸太郎の野球小説『あるキング』を扱い、『マクベス』における「イングランド=中心/スコットランド=周縁」という枠組みが、いかに東日本大震災後に改めて浮き彫りになった日本の文化政治地図「巨人(東京)=中心/楽天(東北=周縁)」に換骨奪胎されているかを論じたものである。

論文での大きな成果は『英文学研究』英文号に掲載された“‘Let us see what our painters have done for us’: Garrick and Sheridan on the Spectacularization of Drury Lane”である。これは、ユグノー派フランス系移民であったギャリックとアイルランド人のシェリダンという、イングランド社会の周縁的存在であった二人が、ドルリー・レイン勅許劇場というロンドン演劇界の中心でいかに自己成型をしていったかを論じたものである。

これらは本研究課題の最終的な成果発表であると同時に、これらの業績が取り上げた問題は本研究課題終了後も継続的な課題として掘り下げ、3年以内に単著として発表される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

1. IWATA, Miki, “‘Let us see what our painters have done for us’: Garrick and Sheridan on the Spectacularization of Drury Lane,” *Studies in English Literature* (55), 2014 年、19-38、査読有
2. 岩田美喜、「ベン・ジョンソン『新しい宿』における女性と脱衣」、『文化』、第 76 巻 3-4 号、2013 年、1-17、査読無
3. 岩田美喜、「『エピソード』における空間と身体」、『*Shakespeare News* (52: 1)、2012 年、19-27、査読有
4. 岩田美喜、「W. B. イェイツ『煉獄』の執筆過程に見る混血恐怖」、『東北大学文学研究科年報』、第 61 号、2012 年、90-106、査読無
5. IWATA, Miki, “I’ll go romancing: The Composite Nature of Storytelling in *The*

Playboy in the Western World,” *Studies in English Literature* (52), 2011, 17-34, 査読有

6. 岩田美喜、「『お人好し』における感受性の経済効率」、『東北英文学研究』(第 1 号)、2010 年、13-26、査読有

[学会発表](計 10 件)

1. 岩田美喜、「負の遺産を語り継ぐ—不在地主としての放浪者メルモス」、『日本英文学会東北支部第 68 回大会』、2013 年 11 月 24 日、東北工業大学
2. IWATA, Miki, “Modern Japanese Helenas in a Metropolitan Courtyard,” *Shakespeare in Global/Local Contexts (the Shakespeare Association of Korea)*、2013 年 11 月 1~2 日、ソウル大学(韓国)
3. IWATA, Miki, “A Macbeth Playing Baseball: Shakespeare Adopted into Japanese Crime Fiction after 3.11,” *European Shakespeare Research Association 2013*、2013 年 6 月 26~29 日、モンペリエ大学(フランス)
4. 岩田美喜、「『まじめが肝心』のくだらなさをまじめに考える」(招待シンポジウム)、『日本ワイルド協会第 37 回大会』、2012 年 12 月 1 日、慶應義塾大学
5. 岩田美喜、「『新しい宿』における女性と脱衣」、『日本シェイクスピア協会第 51 回大会』、2012 年 10 月 14 日、秋田大学
6. 岩田美喜、「今、英文学をどう教えるか」(招待シンポジウム)、『日本英文学会北海道支部第 57 回大会』、2012 年 9 月 30 日、北海学園大学
7. 岩田美喜、「ヴィクトリア朝の諷刺画に見るアイルランド人表象とゴシック・イメージ」(シンポジウム「ゴシックを多角的に見直す」)、『日本英文学会東北支部第 66 回大会』、2011 年 11 月 26 日、東北大学
8. 岩田美喜、「シェリダン演劇のスペクタクル性」(シンポジウム「近代イギリス演劇におけるスペクタクルと音楽」)、『日本英文学会第 83 回大会』、2011 年 5 月 21 日、北九州市立大学
9. IWATA, Miki, “Magnificent Seven Shakespeares: Inventing Shakespeare’s Biography as Manga,” *Orienting Shakespeare*

in East Asia, 2010 年 11 月 25 日、台湾大学
(台湾)

10. 岩田美喜、『『谷間の蔭』のジェンダー・
ポリティックス』、日本イェイツ協会第 46
回大会、2010 年 9 月 25 日、琉球大学

〔図書〕(計 2 件)

1. 東雅夫・下楠昌哉編、岩田美喜ほか著、『幻
想と怪奇の英文学』、春風社、2014 年、360
頁(131-58 頁)
2. 下楠昌哉責任編集、岩田美喜ほか編、『イ
ギリス文化入門』、三修社、2010 年、384
頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 美喜 (IWATA, MIKI)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50361051

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：